NAGATA Kenjiro

長田　堅二郎

富山大学芸術文化学部講師

これまでの研究活動について

私は近年、細い棒状の金属素材を使用した彫刻作品『Derivation』や、糸を素材としたインスタレーション作品『Between』等の制作を主に行っている。これらの作品は、近代彫刻において彫刻を成立させる要素とされてきた量感や素材感を核とする考えから反するものと私自身認識している。現在のこうした表現手法に行き着いた経緯を遡って記し研究制作活動報告とする。

一般に彫刻作品は空間性を作品の主題としている場合が多く、作品と展示空間との関係性を意識し制作される。私自身もそうした考えに触れ、学生時分は「彫刻作品の空間との調和」をテーマにステンレス板材を素材に鏡面加工による金属彫刻の研究を行っていた。しかし制作研究を進めていく中で、徐々に彫刻というものに違和感を感じていった。それは、彫刻が空間の仕事と言われながらも、実際には空間において存在としても素材としても強すぎること。さらに日本語の「彫刻」という言語的先入観と、過去に目にした古高ドイツ語に起源を持つ「彫刻家（Buildhauer）＝イメージを形にする人」という彫刻に対しての根本的な考えの違いを改めて意識したこと。それらがその後の制作の転換の要因となった。

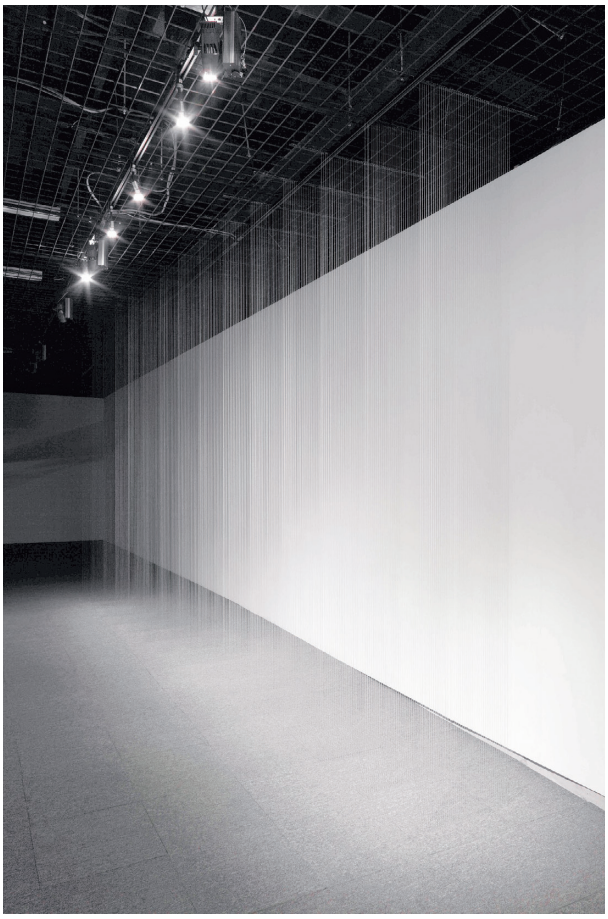
上記の経緯から、完全に覆われた表面形状を維持する作品ではなく、展示空間での作品と鑑賞者の関係を重視し、表現方法としても存在としてもミニマルなものを志向するようになった。具体的な作品としては、2006年から金属棒材を溶接またはハンダ付けして、空間に介入させていくインスタレーション作品『pulsate』を発表した。この作品では展示空間自体を生命体と捉え、人体の血管のように金属棒材を空間に派生させることをコンセプトとした。また作品表面を白色に塗装し、ホワイトキューブの展示空間と同化させ視認しづらくすることでぼんやりと漂うように在ることを目指した。2011年からは、金属の細い棒材（0.28mm～）を平面状に溶接により繋ぎ、派生させていく作品『Derivation』を発表した。身体において血液が毛細血管まで行き渡る様子、神経細胞の接合、樹木植物の枝葉や根、さらには地表の河川の流れや道など、万物を構成する全てのものに共通する樹状形状を彫刻として成立させた作品である。一見平面に見えるこの作品は、台座表面から数センチ浮かし設置し、生じた影も作品の一部とした。光を受ければ影が落ちる、当たり前のことであるがそこには事実としての物体が在り、薄く細いながらも彫刻として存在していることを示した。

同時期から、糸を使用したインスタレーション作品『Between』も発表する。円筒形状やレイヤー状など、様々な形状での展示発表を展開した。この糸を使用した作品では、鑑賞距離や光の陰影状況により形状の認識が困難となった時、何を元に形や表面を決定するのかという問題提起と共に、現代社会で軽んじられている能動的に見るという行為、さらには空間の厚みや奥行きの再提示を目的とした。また、世界中どこででも手に入る糸を素材として使用することで、特定の技術や環境に縛られることなく糸を張るという「誰にでもできる行為」に、彫刻的思考に基づいた配置や間隔等の決定が加わることで「誰にでもできる行為」が、美術表現に転化することを最大の目的としている。

現在は、細い金属素材と糸を中心にその他素材も使用しながら、社会的・生物学的にも世界を構成する普遍性および全てを包括する動的平衡関係をテーマに制作している。また彫刻的な考えでは、量感や表面を覆う形状をもたず、差し引いていった末に残るものが彫刻として重要な要素〈存在の限界〉という考えを重視している。究極を言えば点一つでも空間は変容できると考えており、その意志を持ってどの地域や環境であっても自分の美術表現が新たに展開可能であり、文化や言語を超えて鑑賞者と共感できる普遍性を秘めていると考えている。

また近年では3Dデジタル技術を活用した彫刻作品の研究も行っている。素材を直に触るアナログな手法とデジタル技術の双方を行き来しながら、立体造形分野における新しい造形表現の可能性を模索している。

BETWEEN 2014 / Tokyo Wander Site Shibuya / Photo by Ken Kato



Layers #1 2016 / Photo by Shizune Shiigi

Derivation Core1 2015/ Photo by Ken Kato

Gold Chart（1973~2013）2014